

原 著

## 中学校保健体育教諭の年齢区分からみた 「スポーツマンシップ」に対する認識と指導について

藤原禎子\*<sup>1</sup> 橋本昌栄\*<sup>1</sup> 藤塚千秋\*<sup>2</sup> 藤原有子\*<sup>2</sup> 米谷正造\*<sup>3</sup> 木村一彦\*<sup>3</sup>

### 要 約

中学校保健体育教諭の年齢区分からみた「スポーツマンシップ」に対する認識と指導について

#### 目的

中学校保健体育教諭の「スポーツマンシップ」に対する認識と、体育授業における指導状況を年齢区分別に明らかにし、学校体育における指導のあり方について考察することを目的とした。

#### 方法

全国の中学校から抽出した1500校の体育主任を対象とし、質問紙法調査を郵送法で実施した。2005年8月中旬から9月初旬にかけて実施した。

#### 結果

- ①年齢が高い層ほど「スポーツマンシップ」を重要視しており、20代より30・40代が有意に高かった。
- ②20代より50・60代は「スポーツマンシップ」について生徒に説明できるものが有意に多かった。
- ③20代より50・60代は、授業中に起こるトラブルについての指導が有意に多かった。
- ④全体的に指導することでの効果が認められ、二つの項目において20代より30・40代の効果が有意に高かった。

#### まとめ

「スポーツマンシップ」についての指導には、経験だけでなく「スポーツマンシップ」への重要性認識も影響している。若手教諭は「スポーツマンシップ」に対する重要性認識をもち、授業中の態度の評価を念頭において指導していくことが必要である。

### 緒 言

さまざまなストレスによって児童生徒の心の健康を乱し、校内暴力、いじめ、不登校などの問題を引き起こしている。これらへの対応として運動、スポーツに期待するところは大きい。文部科学省は平成11年の中学校学習指導要領改訂<sup>1)</sup>に伴い「体ほぐし運動」を入れ、保健分野においてもストレスの解消法としてこの「体ほぐし運動」と関連を図って指導するよう定めた。

一方、学校教育に体育が必修として入っている理由の一つには、近藤<sup>2)</sup>がいうように体育がフェアプレイをはじめとするスポーツ規範を修得する場となりうるからである。そしてその上でスポーツ場面で

獲得したこれらの態度が習慣化され、運動の場面だけでなく日常生活に生かされる可能性を持っている。これは他の教科と比較して運動場面には社会的、道徳的な判断が迫られる数々の要因があり、そこで学習される内容はそれ以外の問題に関連させることができるからである。このスポーツ規範の精神を「スポーツマンシップ」と考えると、学校教育に於いて「スポーツマンシップ」を身に付けた児童・生徒の育成は重要となる。

そこで本研究は多種のスポーツを全ての生徒に指導する中学校の体育教員が「スポーツマンシップ」についてどのような認識をもち、それを授業の中で指導しているかを年齢区分別に明らかにし、学校体育における指導のあり方について考察することを目的とした。

\*1 川崎医療福祉大学大学院 医療技術研究科 健康体育学専攻 \*2 川崎医療福祉大学大学院 医療技術研究科 健康科学専攻

\*3 川崎医療福祉大学 医療技術学部 健康体育学科

(連絡先) 藤原禎子 〒701-0193 倉敷市松島288 川崎医療福祉大学

E-Mail: w6304009@mw.kawasaki-m.ac.jp

## 方 法

## 1. 調査対象と方法

全国の中学校から「全国学校総覧2005年度版」<sup>3)</sup>を使用して系統抽出法により抽出した1500校(全国14,379校の10.4%)の体育主任を対象とし、「体育におけるスポーツマンシップの指導」についての自己記入方式の質問紙法調査を郵送法で実施した。2005年8月中旬から9月初旬にかけて実施した。

502部回収し回収率は33.5%であった。そのうち有効回答は495部であった。

## 2. 調査内容

調査内容は属性、「スポーツマンシップ」に対する認識について、体育授業における「スポーツマンシップ」の指導状況について12項目の質問した。

## 3. 倫理的配慮

川崎医療福祉大学倫理委員会で許可の得られた藤原<sup>4)</sup>の方法と同様の手法を用いた。すなわち調査にあたっては研究目的、調査内容、データの使用方法、データ廃棄処理法、提出後は撤回できない旨についての説明文を同封し、アンケート冒頭に承諾書をつけ承諾の得られた者のみに回答してもらった。

## 4. 分析

分析にはSPSS for windows13を用い、クロス集計と $\chi^2$ 乗検定を実施した。

## 結 果

## 1. 対象者の属性

対象者の属性について年齢別割合、性別を表1、2に示す。また年齢別の調査項目分析に用いる年齢区分について表3に示す。

なお全ての項目に性差は認められなかったので、以下の分析では男女を合わせた年齢区分別に分析した。

## 2. 教師の「スポーツマンシップ」に対する認識状況

教師の「スポーツマンシップ」に対する認識を明らかにするために、(1)「学習指導要領、科目体育の目標にある[公正]、[協力]、[責任]、[尊重]、[互いの良さを認め合う]等の態度は、スポーツマンシップに当てはまるものだと思いますか。」(2)「スポーツマンシップはスポーツを実践する場合に、最も重要な価値だと思いますか。」(3)「体育の授業で生徒にスポーツマンシップを身に付けさせることができる

表1 年齢別割合

年齢	人数	%
20代	45	9.1
30代	126	25.5
40代	234	47.3
50代	86	17.4
60代	4	0.8
合計	495	100

表2 性別の割合

性別	人数	%
男性	401	81.0
女性	94	19.0
合計	495	100

表3 年齢3区分別割合

年齢 3区分	人数	%
1 20代	45	9.1
2 30・40代	360	72.7
3 50・60代	90	18.2
合計	495	100

と思いますか。」(4)「スポーツマンシップについて生徒に十分説明できると思いますか。」の4つの設問をした。これに「とても思う」「思う」「どちらともいえない」「思わない」「全く思わない」の選択肢を示して回答を求めた。しかし多くのセルが少数になるため「とても思う」「思う」を合わせて新たに「思う」「思わない」「全く思わない」を合わせて新たに「思わない」とし、「どちらともいえない」の3群とした。

2.1 「学習指導要領、科目体育の目標にある[公正]、[協力]、[責任]、[尊重]、[互いの良さを認め合う]等の態度は、スポーツマンシップに当てはまるものだと思いますか。」に対する年齢3区分別の結果を図1に示す。

全体として、「思う」462人(93.3%)「どちらともいえない」28人(5.7%)「思わない」5人(1.0%)であった。

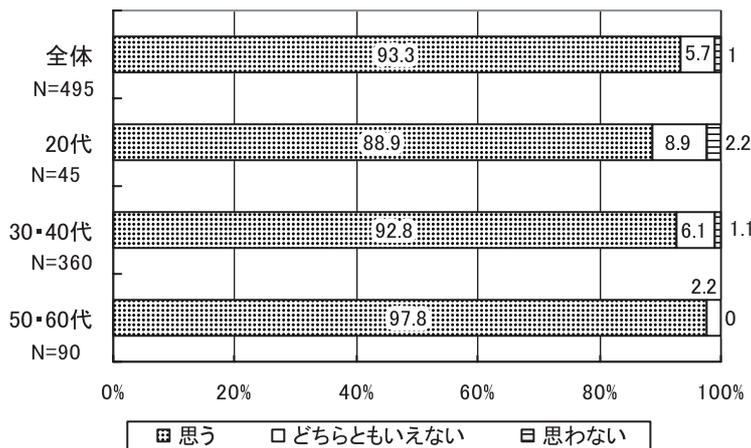


図1 「学習指導要領,科目体育の目標にある[公正],[協力],[責任],[尊重],[互いの良さを認め合う]等の態度は,スポーツマンシップに当てはまるものだと思いますか。」に対する年齢3区分別の結果

これには年齢区別に有意な差を認めることができなかった。

2.2,「スポーツマンシップはスポーツを実践する場合に,最も重要な価値だと思いますか。」に対する年齢3区分別の結果を図2に示す。

全体として,「思う」404人(82.1%)「どちらともいえない」79人(16.1%)「思わない」9人(1.8%)であった。

これを年齢3区別にみると20代では,「思う」30人(66.7%)「どちらともいえない」14人(31.1%)「思わない」1人(2.2%)であった。

30・40代では,「思う」301人(84.3%)「どちらともいえない」50人(14.0%)「思わない」6人(1.7%)であった。50・60代では,「思う」73人(81.1%)「どちらともいえない」15人(16.7%)「思わない」2人(2.2%)であった。

全体でみると年齢が高い層ほど「スポーツマンシップ」が重要であるという $p=0.61$ という傾向が認められ,特に20代と30・40代との間に有意な差が認められた。

2.3,「体育の授業で生徒にスポーツマンシップを身に付けさせることができると思えますか。」に対する年齢3区分別の結果を図3に示す。

全体として,「思う」362人(73.3%)「どちらともいえない」119人(24.1%)「思わない」13人(2.6%)であった。

これには年齢区別に有意な差を認めることができなかった。

2.4,「スポーツマンシップについて生徒に十分説明できると思えますか。」に対する年齢3区分別の

結果を図4に示す。

全体として,「思う」365人(74.5%)「どちらともいえない」104人(21.2%)「思わない」21人(4.3%)であった。

これを年齢3区別にみると,20代は「思う」25人(55.6%)「どちらともいえない」17人(37.8%)「思わない」3人(6.7%)であった。30・40代は「思う」265人(74.2%)「どちらともいえない」74人(20.7%)「思わない」18人(5.0%)であった。50・60代は「思う」75人(85.2%)「どちらともいえない」13人(14.8%)「思わない」0人(0%)であった。

特に20代と50・60代との間に有意な差が認められた。

### 3. 体育授業における「スポーツマンシップ」の指導状況

体育授業における「スポーツマンシップ」の指導状況を明らかにするため(5)授業のはじめ(導入)やおわり(まとめ)の時にスポーツマンシップについて生徒に説明したことがありますか。(6)授業中に起こるトラブルや問題をその場で取り上げて生徒にスポーツマンシップについて指導することはありますか。の二つの設問をした。また,回答を「よくある」「ある」を「ある」,「どちらともいえない」,「ない」「全くない」を「ない」と3段階として比較した。

(5)「授業のはじめ(導入)やおわり(まとめ)の時にスポーツマンシップについて生徒に説明したことがありますか。」に対する年齢3区分別の結果を図5に示す。

全体として,「ある」360人(73.0%)「どちらともいえない」86人(17.4%)「ない」47人(9.5%)であった。

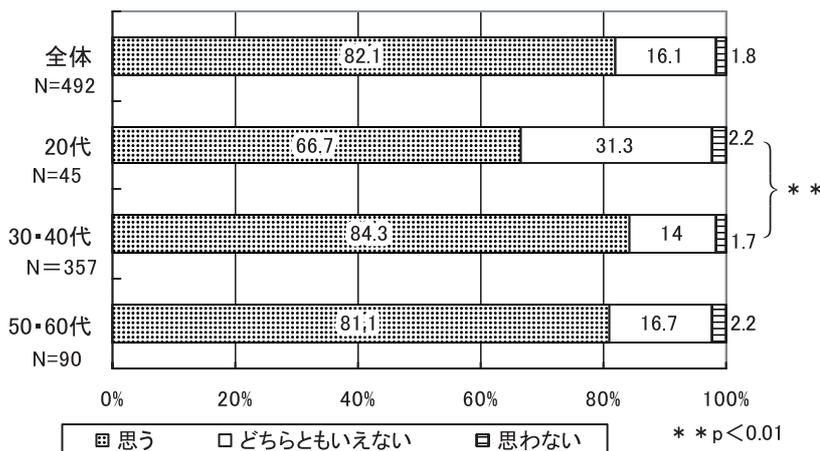


図2 「スポーツマンシップはスポーツを実践する場合に、最も重要な価値だと思いますか。」に対する年齢3区分別の結果

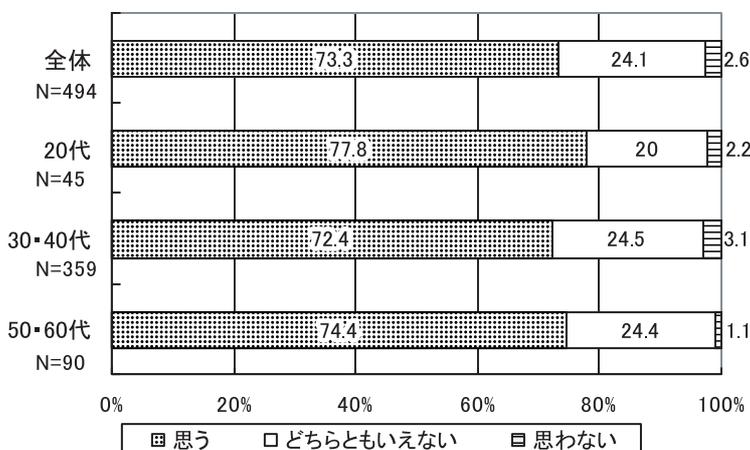


図3 「体育の授業で生徒にスポーツマンシップを身に付けさせることができると思いますか。」に対する年齢3区分別の結果

これには年齢区分別に有意な差を認めることができなかった。

(6)「授業中に起こるトラブルや問題をその場で取り上げて生徒にスポーツマンシップについて指導することはありますか。」に対する年齢3区分別の結果を図6に示す。

全体として、「ある」385人(83.7%)「どちらともいえない」55人(12.0%)「ない」20人(4.3%)であった。

これを年齢3区分別にみると、20代は「思う」26人(66.7%)「どちらともいえない」8人(20.5%)「思わない」5人(12.8%)であった。30・40代は「思う」279人(83.5%)「どちらともいえない」41人(12.3%)「思わない」14人(4.2%)であった。50・60代は「思う」80人(92.0%)「どちらともいえない」6人(6.9%)「思わない」1人(1.1%)であった。

特に20代と50・60代との間に有意な差が認められた。

### 3.1. 指導場面と指導内容

(5)「授業のはじめ(導入)やおわり(まとめ)の時にスポーツマンシップについて生徒に説明したことがありますか。」という設問で「よくある」「ある」と回答した360人(73.0%)を対象に、どのような場面で指導しているのかを聞いた。場面として「毎時間ごと」「単元ごと」「学期ごと」「学年始め」「特に決まっていない」、以上の5場面を提示し回答してもらった。年齢3区分別の結果を図7に示す。

「毎時間ごと」16人(4.5%)「単元ごと」91人(25.5%)「学期ごと」10人(2.8%)「学年始め」18人(5.0%)「特に決まっていない」222人(62.2%)であった。これには年齢区分別に有意な差を認めることができなかった。

(6)「授業中に起こるトラブルや問題をその場で取り上げて生徒にスポーツマンシップについて指導することはありますか。」という設問で「よくする」「する」と回答した385人(83.7%)を対象に、授業中

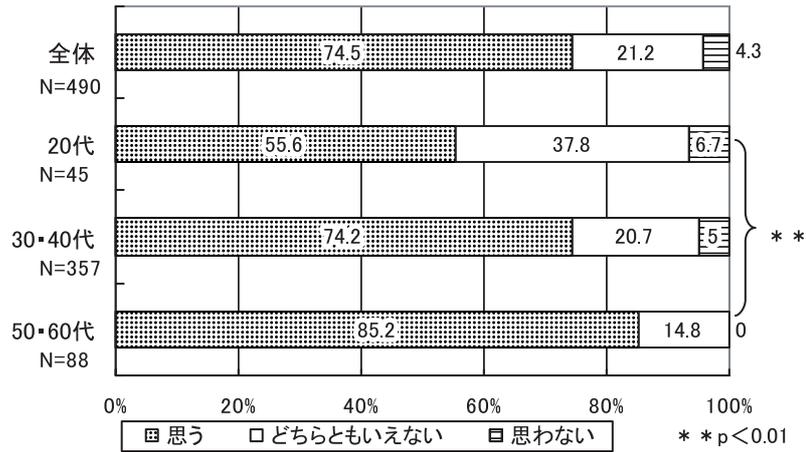


図4 「スポーツマンシップについて生徒に十分説明ができると思いますか。」に対する年齢3区分別の結果

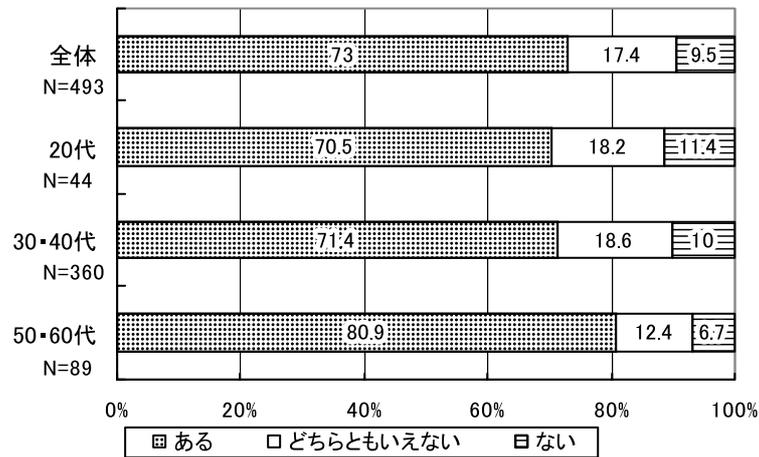


図5 「授業のはじめ（導入）やおわり（まとめ）の時にスポーツマンシップについて生徒に説明してことがありますか。」に対する年齢3区分別の結果

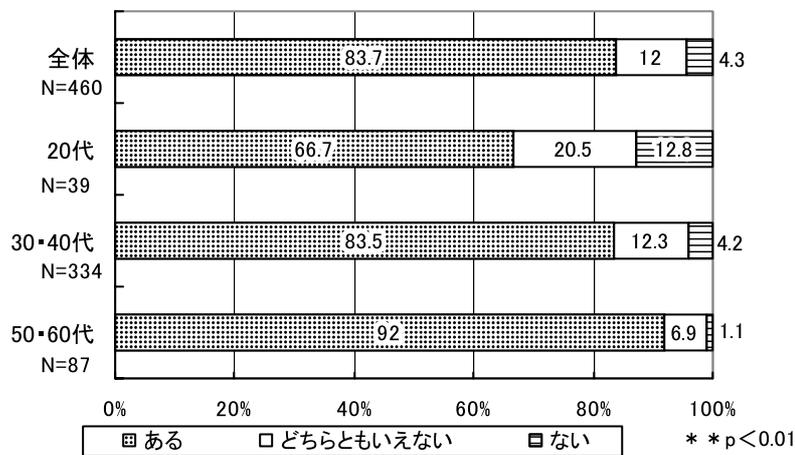


図6 「授業中に起こるトラブルや問題をその場で取り上げて生徒にスポーツマンシップについて指導することはありますか。」に対する年齢3区分別の結果

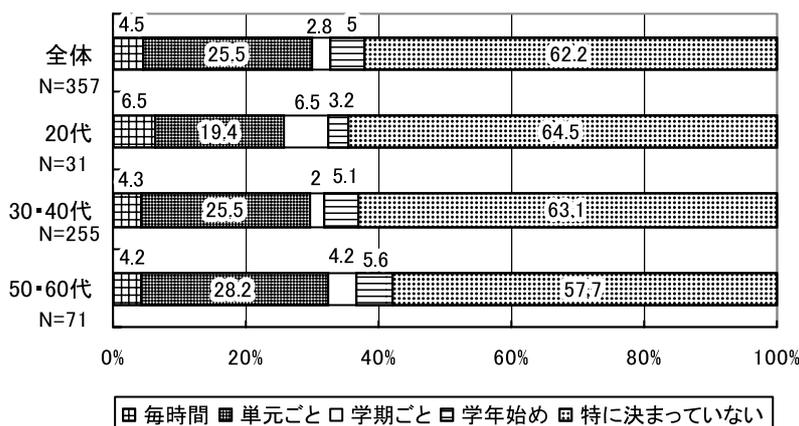


図7 授業のはじめ(導入)やおわり(まとめ)の時にスポーツマンシップについて生徒に説明する時の場面の年齢3区分別の結果

のどのような場面での指導が多いのかを知るため、①「ルール違反をした時」②「審判に従わない、又は文句を言った時」③「一生懸命やらなかった時」④「相手とケンカした時」⑤「仲間割れをした時」⑥「負けたチームの態度が悪かった時」⑦「準備や片付けに協力しなかった時」⑧「その他」、以上の8場面を提示し、当てはまるものを複数回答により回答してもらった。結果は図8に示す。

これも年齢区分別に有意な差を認めることはできなかった。

回答の多かったものから③「一生懸命やらなかった時」244人(63.4%)、②「審判に従わない、又は文句を言った時」215人(55.8%)、⑦「準備や片付けに協力しなかった時」209人(54.3%)、①「ルール違反をした時」152人(39.5%)、⑤「仲間割れをした時」137人(35.6%)、⑥「負けたチームの態度が悪かった時」130人(33.8%)、④「相手とケンカした時」83人(21.6%)、⑧「その他」8人(2.1%)であった。上位の③「一生懸命やらなかった時」、②「審判に従わない、又は文句を言った時」、⑦「準備や片付けに協力しなかった時」は、その他の項目よりも有意に多かった。

さらに、「その指導によって生徒の意識や行動に良い変化がありましたか」という設問をし、①「相手を尊重する態度」②「審判を尊重する態度」③「準備や片付けに協力する態度」④「応援する時の態度」⑤「仲間に対する態度」⑥「全力を尽くす態度」⑦「フェアプレイを行う態度」⑧「その他」、以上の8つの態度についてそれぞれ回答してもらった。年齢3区分別の結果を図9に示す。

全体として①「相手を尊重する態度」では「思う」322人(90.7%)「どちらともいえない」31人(8.7%)

「思わない」2人(0.6%)であった。②「審判を尊重する態度」では「思う」284人(80.0%)「どちらともいえない」66人(18.6%)「思わない」5人(1.4%)であった。③「準備や片付けに協力する態度」では「思う」293人(83.5%)「どちらともいえない」53人(15.1%)「思わない」5人(1.4%)であった。④「応援する時に態度」では「思う」298人(84.2%)「どちらともいえない」52人(14.7%)「思わない」4人(1.1%)であった。⑤「仲間に対する態度」では「思う」313人(88.2%)「どちらともいえない」40人(11.3%)「思わない」2人(0.6%)であった。⑥「全力を尽くす態度」では「思う」287人(80.7%)「どちらともいえない」63人(17.7%)「思わない」6人(1.7%)であった。⑦「フェアプレイを行う態度」で0.8%であった。⑧「その他」では「思う」17人(94.5%)「どちらともいえない」1人(5.6%)「思わない」0人(0%)であった。

このうち①「相手を尊重する態度」と⑤「仲間に対する態度」において年齢3区分の間に有意差が認められた。

①「相手を尊重する態度」では20代「思う」24人(77.4%)「どちらともいえない」5人(16.1%)「思わない」2人(6.5%)であった。30・40代「思う」229人(90.8%)「どちらともいえない」23人(9.1%)「思わない」0人(0%)であった。50・60代「思う」69人(95.8%)「どちらともいえない」3人(4.2%)「思わない」0人(0%)であった。特に20代と30・40代の間に有意差が認められた。

⑤「仲間に対する態度」では20代「思う」26人(83.8%)「どちらともいえない」3人(9.7%)「思わない」2人(6.5%)であった。30・40代「思う」224人(88.5%)「どちらともいえない」29人(11.5%)「思わない」0人(0%)であった。50・60代「思う」

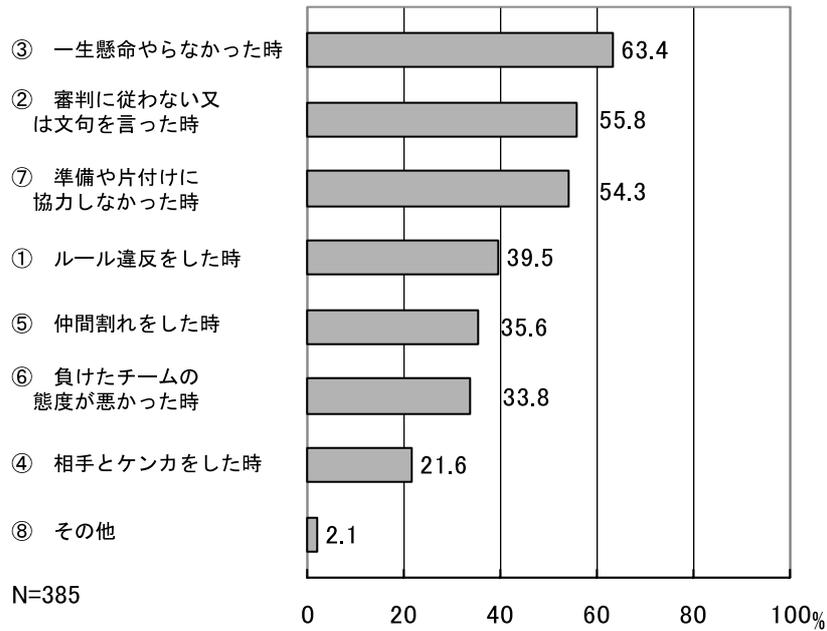


図8 授業中に起こるトラブルや問題をその場で取り上げてスポーツマンシップについて指導する場合のよく指導する場面

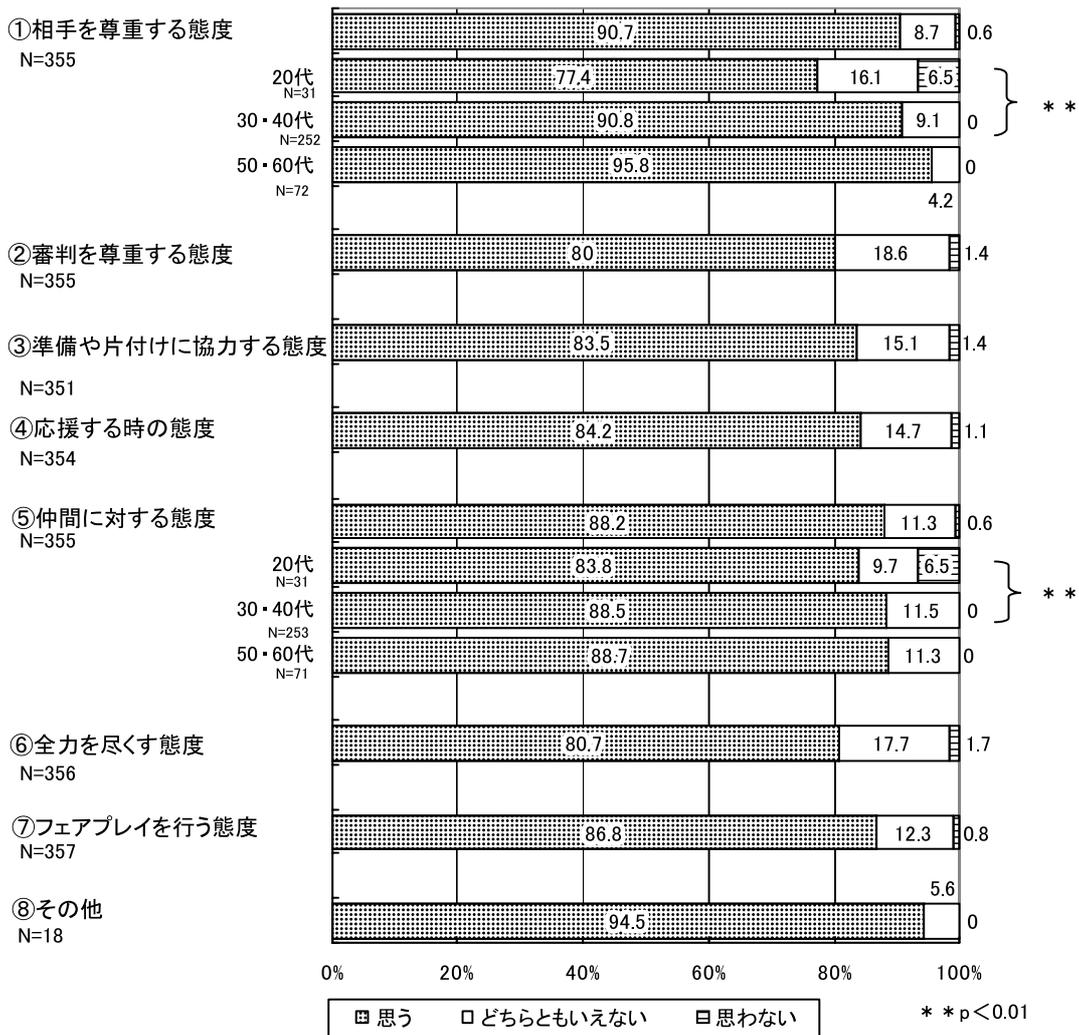


図9 「その指導によって生徒の意識や行動に良い変化があったと思うか。」の結果

63人(88.7%)「どちらともいえない」8人(11.3%)「思わない」0人(0%)であった。特に20代と30・40代の間に有意差が認められた。

## 考 察

### 1. 学習指導要領に示す態度と

「スポーツマンシップ」について

文部科学省, 中学校学習指導要領<sup>1)</sup>「保健体育」科目「体育」の目標の(3)は、「運動における競争や協同の経験を通して, 公正な態度や進んで規則を守り互いに協力して責任を果たすなどの態度を育てる。また, 健康・安全に留意して運動をすることができる態度を育てる。」と定めている。そのことについて中学校学習指導要領解説, 保健体育編<sup>5)</sup>によると, 「運動にはそれぞれ独自のルールや欠くことのできないマナーがあり, 運動をフェアに行うためにはこれらを身に付けておくことが重要であること, また各種の運動を通して生徒が身に付けたルールやマナーを守ること勝敗に対する公正な態度などは, 単に運動の場面だけでなく社会生活における望ましい態度や行動にもつながり, 人間形成に役立つものであることを示している。」等と解説している。

また, 学習指導要領では体育の内容には7つの運動種目の領域と「体育に関する知識」と合わせて8つの領域が示され, これら7つの運動種目の領域についてはそれぞれ「技能の内容」「学び方の内容」とともに「態度の内容」が示されている。そしてこの「態度の内容」には種目によって「公正」「協力」「責任」「尊重」「互いの良さを認め合う」等といった具体的な態度が示されている。

この中には「スポーツマンシップ」という言葉の明記はない。今回の調査では中学校保健体育教諭は学習指導要領の示すスポーツ場面で培われる態度に対して, これは「スポーツマンシップ」と同じであると認めるものは「とても思う」289人(59.1%)「思う」167人(34.2%)であり, これを合わせて93.3%に上った。ところで著者ら<sup>6)</sup>が先に調査した某高校の生徒の場合「スポーツマンシップ」という言葉自体はよく知っているが, それを具体的に説明できる生徒は少なく, また, 運動部活動はともかく体育授業によって「スポーツマンシップ」を学んだと認識している生徒は少数であった。また著者ら<sup>7)</sup>は某県の高校生を対象とした調査に「公正, 協力, 責任などの態度」を体育授業時に約8割の生徒が意識していることを認めた。これら2つの調査の生徒の認識の差は学校体育の中では態度の内容を「スポーツマンシップ」と関連させて指導していないことを示唆し

ている。これらの態度は体育の教材であるスポーツ場面を通して培われるものであることから, いわゆる「スポーツマンシップ」と置き換えても良いと考える。競技会等運動部活動では「スポーツマンシップ」という言葉が一般的であり, これを使用することが望まれる。

### 2. 中学校体育教員の「スポーツマンシップ」の重要性認識について

「スポーツマンシップはスポーツを実践する場合に最も重要な価値だと思いますか。」に対して82.1%のものが「思う」と回答したように, 「スポーツマンシップ」を重要視していることが明らかになった。

しかし, これは年齢区分別に差がある傾向( $p=0.61$ )を示し特に20代のものが30・40代と比較して有意に低いことが認められた。学習指導要領はほぼ10年ごとに改訂されている。高橋<sup>8)</sup>がいう「運動を通して何かを求める」運動手段論から「運動を行うこと」を目的とする運動目的論に学習指導要領が変換したのは1977年(昭和52年)の改訂からである。30・40代は, このときに教員養成期間にある大学生であり, 20歳代はこのとき「いわゆる楽しい体育」を中学生・高校生として自ら学習してきた年齢にあたる。この設問では「最も」という語句を入れているが, ここに各教諭がそれまで学んできた教育の違いが認識に影響を与えたことは推察できる。

また, このことは「スポーツマンシップについて生徒に十分説明できると思いますか。」に於いて, 50代以上85.2%, 30・40代74.2%, 20代55.6%と全体として1%の有意水準で年齢が高いほど「思う」が多いこと, さらに50代以上と20代の間に差がみられたことから解る。「保健体育」<sup>9)</sup>は高等学校の教科書であるが「スポーツは一定のルールやマナーを忠実に守って行われるべきことを忘れてはならない。競技のマナーは相手に対してだけでなく, 当然自己のチームに対しても求められるものである・・・」と記載され, さらにわざの最高度の発揮, 正々堂々とたたかう, 互いに友人として尊敬する態度などの語句が続いている。これは現行学習指導要領の解説の文章よりも「スポーツマンシップ」を著す文章となっていた。これに対し1977年改訂学習指導要領準拠の「最新保健体育」<sup>10)</sup>にはこれらの語句は全く入っていない。

現行の学習指導要領の中でも「学習の学び方」すなわち工夫の大切さとともに「態度の育成」も重要であることは示されており, その大切さはいうまでもない。「スポーツマンシップ」に対する認識を高め, 生徒に対して十分な説明とその場その場でこ

の点に関しても生徒に工夫させることが望まれる。

ただし高橋<sup>8)</sup>は、この学習指導要領の改訂はそれまでの運動手段論によって生徒に運動好きの体育嫌いを生み、生涯体育への移行を妨げるという反省から変換されたと指摘している。「スポーツマンシップ」を身に付けることが運動をより楽しく、喜びを持って行えることを生徒に理解させる指導の工夫がある。そのことは教育基本法に示される全人格形成に寄与する体育という概念と決して矛盾しない。

### 3. 体育授業における「スポーツマンシップ」の指導状況

まず、各授業のはじめとおわりに「スポーツマンシップ」に関わることを指導しているかをみた。

「授業のはじめ(導入)やおわり(まとめ)の時にスポーツマンシップについて生徒に説明したことがありますか。」の回答に世代間の有意差は認められなかったが、全体では「する」が73.0%であった。生徒が全員集合したときにその日の態度に関する学びの重点目標も、技能のねらい、学びのねらいと同時に説明することは観点別評価の意味からも必要なことである。

また、授業のなか(展開)でおこる「体育授業時、ゲームなどの最中におこるトラブルや問題をその場で取り上げてスポーツマンシップについて指導することはありますか。」では全体で83.7%が行っていた。これには年齢区分別全体として1%水準の有意差を認めた。すなわち50代以上は92.0%、30・40代は83.5%、20代は66.7%であった。

よく指導する場面として「一生懸命やらなかった時」63.4%「審判に従わない、又は文句を言った時」55.8%「準備や片付けに協力しなかった時」54.3%等が他の場面より有意に多かった。このように問題等の発生場面に於いて年齢区分の高い層の方がその都度指導していることが認められた。

前項で示した教諭が学んできた「スポーツマンシップ」による認識の差がなせる技とも考えられるが、高橋ら<sup>11)</sup>が「熟練教師と一般教師では、熟練教師の方が生徒の発言や疑問に耳を傾ける傾向にあり、賞賛が多く見られ全体として肯定的に関わっており、個々の児童により積極的に働きかける傾向がある」というように経験が関わっている可能性もある。

さらにそのような指導が年間計画、単元計画、本時案のどの時期に行うかを設問として上げたが、「特に決まっていない」62.2%、「単元ごと」25.5%であり、年齢区分間に有意な差は認められなかった。これも定期的に行うというよりも授業の中で発生する生徒の行動にその都度行っていることが読み取れる。

注意に対する効果は全ての項目で80%を超えており、注意をすると効果があることがわかった。この中で「相手を尊重する態度」、「仲間に対する態度」については、20代と比較して30・40代以降の層が効果を認めていた。

スポーツマンシップの原点は、金子<sup>12)</sup>によれば一言では「尊重」にあると言われるが、年齢区分の高い層にこの意識が強く声かけやタイミングの違いが出て効果が表れたと考えられる。

「中学校保健体育指導資料」<sup>13)</sup>も指摘するように授業の展開の中で学習活動のねらいと形式的評価は表裏の関係にある。この点「スポーツマンシップ」についてその都度指導が行えるのは経験や熟練度ばかりでなく前項で述べたように「スポーツマンシップ」の重要性の認識をもち、授業中の態度の評価が念頭になければ指摘を多くすることはできない。翻って考えると経験は「スポーツマンシップ」の重要性を認識させるようになるとも考えられるがここでは結論を出すことはできない。

いずれにしても今後の体育授業をよくするためには「スポーツマンシップ」について教諭自らが十分説明ができ、その重要性を認識した上で生徒に接することが大切になる。そして前述したように「スポーツマンシップ」の獲得が運動をより楽しく、喜びを持って行えることを生徒に認識させる授業の展開が必要である。

これまでは「スポーツマンシップ」という言葉はよく知られているがきちんと説明されてこなかった。そのため選手宣誓等ではよく使われるが、どこか飾りのような、実社会においては置いてきぼりになっているもののように感じる。「スポーツマンシップ」は競技スポーツをしている人だけではなく、スポーツをする誰もが持つべき、とても身近なものである。相手を尊重すること、ルールを守ること等が、自然にできる人間の育成の為に、誰もが受講する学校体育において「スポーツマンシップ」を身につけさせることは大変意義のあることである。

### ま と め

中学校保健体育教諭の「スポーツマンシップ」に対する認識と、体育授業における指導状況を年齢区分別に明らかにし、学校体育における指導のあり方について考察することを目的とした。

全国の中学校から系統抽出法により抽出した1500校(全国14,379校の10.4%)の体育主任を対象とし、自己記入方式の質問紙法調査を郵送法で実施した。2005年8月中旬から9月初旬にかけて実施した。

502部回収し回収率は33.5%であった。そのうち有効回答は495部であった。結果は次の通りである。

①年齢が高い層ほど「スポーツマンシップ」を重用視しており、特に20代より30・40代が有意に高かった。②「スポーツマンシップ」について生徒に説明できるものは20代より50・60代が有意に多かった。③授業中に起こるトラブルについての指導は20代より50・60代が有意に多かった。④全ての項目におい

て指導に対する効果が認められ、二つの項目においては20代よりも30・40代の効果が有意に高かった。

「スポーツマンシップ」についての指導には、経験ばかりでなく「スポーツマンシップ」の重要性認識も影響している。若手教諭は「スポーツマンシップ」に対する重要性認識をもち、授業中の態度の評価を念頭において指導していくことが必要である。

#### 文 献

- 1) 文部科学省：中学校学習指導要領。改訂版，国立印刷局，東京，72-81，2004。
- 2) 近藤良亨：第2部3 体育とフェアプレイ。友添秀則，岡出美則編，教養としての体育原理，初版，大修館書店，東京，39，2005。
- 3) 全国学校データ研究所：全国学校総覧。2005年度版，株式会社原書房，東京，205-391，2004。
- 4) 藤原有子，橋本昌栄，藤原禎子，米谷正造，木村一彦：小学校教諭の水泳経験と児童・生徒への月経時の水泳に対する指導について。岡山体育学会・日本体育学会岡山支部研究発表会2004年度春季大会号，5-6，2005。
- 5) 文部科学省：中学校学習指導要領解説—保健体育編—。一部補訂1版，東山書房，京都，20-21，2004。
- 6) 藤原禎子，橋本昌栄，藤塚千秋，藤原有子，米谷正造，木村一彦：某高校生徒の「スポーツマンシップ」についての認識状況。岡山体育学会・日本体育学会岡山支部研究発表会2004年度秋季大会号，5-6，2004。
- 7) 藤原禎子，橋本昌栄，藤塚千秋，藤原有子，米谷正造，木村一彦：高等学校学習指導要領，科目体育の内容に示される「態度の内容」に関する検討。川崎医療福祉学会誌，15(1)，191-199，2005。
- 8) 高橋健夫：第2章 体育科の目的・目標論。竹田清彦，高橋健夫，岡出美則編著，体育科教育学の探求—体育授業づくりの基礎理論，初版，大修館書店，東京，18-25，1997。
- 9) 浅野均一，佐々木吉蔵：保健体育。改訂版，一橋出版株式会社，東京，64-65，1980。
- 10) 大木昭一郎：最新保健体育。初版，一橋出版株式会社，東京，1998。
- 11) 高橋健夫，岡澤祥訓，中井隆司，芳本真：体育授業における教師行動に関する研究—教師行動の構造と児童の授業評価との関係—。体育学研究，30(3)，194-208，1991。
- 12) 金子藤吉：新体育学大系7 コーチのためにスポーツモラル。セット版，逍遙書院，東京，1980。
- 13) 文部省：中学校保健体育指導資料—指導計画の作成と学習指導の工夫。第4刷，東山書房，京都，109-117，1995。

(平成17年11月20日受理)

## About Recognition and Teaching of Sportsmanship to Different Age Groups by a Junior High School Physical Education Teacher

Sachiko FUJIWARA, Masae HASHIMOTO, Chiaki FUJITSUKA,  
Yuko FUJIWARA, Syozo YONETANI and Kazuhiko KIMURA

(Accepted Nov. 20, 2005)

Key words : sportsmanship, junior high school, physical education teacher, recognition, teaching

### Abstract

About Recognition and Teaching of Sportsmanship to Different Age Groups by a Junior High School Physical Education Teacher.

#### Purpose

The purpose of this study was to investigate junior high school physical education teachers' recognition level as it relates to sportsmanship, and its situation within teaching. And to give advice for better teaching about physical education.

#### Method

Questionnaires were used and carried out from the middle of August to early September, 2005. We examined the head teachers of physical education departments. Those junior high schools were selected by random sampling from the whole country.

#### Results

Older teachers recognized sportsmanship more easily. Especially, teachers in their thirties and forties recognized sportsmanship at much higher levels than those in their twenties. The teacher who can explain sportsmanship to their students is in their thirties and forties not in their twenties. The teacher who can teach it when trouble occurs during the game is in their fifties and sixties not in their twenties.

#### Conclusion

Influences about Sportsmanship teaching is not only the experience but also recognition to Sportsmanship. Young teachers have to recognize sportsmanship more and more teach themselves to better evaluate the attitudes of their students during physical education classes.

Correspondence to : Sachiko FUJIWARA    Master's Program in Health and Sports Science, Graduate School of Health Science and Technology, Kawasaki University of Medical Welfare Kurashiki, 701-0193, Japan  
E-Mail: [w6304009@mw.kawasaki-m.ac.jp](mailto:w6304009@mw.kawasaki-m.ac.jp)  
(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.15, No.2, 2006 433-443)